

森の喫茶店

469 落ち葉と勝負の巻 作画:ろくろ-ぶな



25歳 ひきこもり当事者手記

“どうしたら働けるんだ”と思う日々



体力も続ける自信もない

“それでも働かなきゃ”と焦り

今回執筆したのは、PNイエローさん。「働く」ことをめぐって葛藤している気持ちを書いていただいた。

私は25歳の現役ひきこもりになり、フリースクールに通っています。小学6年で不登校になりました。フリースクールの卒業したあとは、家で過ごしています。

フリースクールにいたころから、気になっていいることがありません。それは「働くことができない」ということです。同じ年の子の「や」とバイト先が決まったよとか「居酒屋のバイトを始めるんだ」という話を聞くと、「なんでそんなことできるの?」と思います。私は電車移動するだけでヘトヘトになってしまつのに、なんでそんなに体力があるのかと、「同じ不登校でも優劣があるのか?」と焦りと不安でいっぱいになるとともに、「自分も働かなければ強く思いました。働いて自由に使えるお金を得れば、親の目を気にせず好きに遊べるし、ほしいものも気軽に買えます。それに、アルバイトをすれば、私という存在を社会が認め

てくれると思っていまして。不登校だったし、ひきこもった時期もあるけど、今はフリーターとして働いている。そう言うようになりたかったのです。

ある日、意を決して、母に置き手紙を残しました。私は生活時間がちがうので、大事な話をするときもいつも置き手紙なのです。「なぜ、アルバイト情報誌を持ち帰ってくるのですか?私ほども焦り、傷ついてます。母からは「そう思っていたんだ、ごめんね。じつは私のいまの職場よりも時給がいいところを探すために持ち帰っていました。あなたを傷つけていたなら、ごめんね」と返事がありました。

どうやら私の早とちりだったようです。考えすぎていたのかも知れません。しかし「だったら早くそう言ってくればよかったのに。私のこの間の焦りはなんだったんだ」というのも正直な気持ちです。

働きたいけど働きたくない

私自身、働いていない今の状態は、とても恥ずかしくてたまりません。だから働いてみたいけれど、同時に働きたくない自分もいるんです。ほしいものは買えず、家でゲームやインターネットをしなからず「そこそこの生活」に満足もしています。それに働いてみただけ失敗して、怖くなって働けなくなりました。という不登校経験者の話を何度か聞いたこともあり、働くことへの恐怖もありました。いずれにせよ、親や外部の働きかけによってではなく、動けるときがきたら、自分のタイミングで動いていきたいと思っています。(PNイエロー)

母の行動に

2年ほどまえのことですが、とても焦ったことがありました。

不死鳥のようによみがえる

バイト情報誌にゾクゾクする

読者の方にも伝えたいことなのですが、働いていない不登校やひきこもりの人の中には「もういい年なんだから、いいかげん働いたら?」という無言の圧力をかけられているように感じました。母が復た後、私はバイト情報誌をゴミ箱に捨てるのですが、翌日になんとまた居間にもどって「います。なんなんだよ!」という気持ちでモヤモヤする毎日でした。

「どうして世の中バカばかりなんだ!」。高校1年生の夏、軽音部をクビになった私は荒れていた。どいつもこいつも、女子が喜ぶ曲を中途半端にチャラチャラ演るのが一番イケてると思ってる。内輪だけで盛り上がるリア充たちに越えられない壁を感じ、途方に暮れた。カッコいいってどういうことだ……。そんなときに出会って

“カッコいい”に出会ってしまった

しまったのが、Dragonforceの“Through the Fire and Flames”。この曲に出会うまで、ヘヴィメタルなどカッコいいとは程遠いジャンルとっていた。衝撃だった。地震みたいなドラム、光速のギター、歌詞も猥褻で猟奇的な要素なんていっさいない。ド度肝を抜かれた。「カッコいいってこういうことだ!!」。このときから私の価値観の核が形成された。

何がダサくて、何がカッコいいのかわからなくなったとき、大事なことを思い出させてくれる、今でも大切な一曲。(田原祐樹/仮名・20代)

次回の子ども若者編集会議

日にち **11月19日(日)**
※毎月第3日曜日開催
時間 午後1時~午後4時
会場 東京シューレ王子3F
東京都北区岸町1-9-19
最寄駅 JR・東京メトロ南北線
「王子」駅より徒歩5分
連絡先 全国不登校新聞社・東京編集局
TEL:03-5963-5526(茂手木)
メール tokyo@futoko.org
備考 親などの付き添い同伴可

子ども若者編集部コラム

このコーナーは、子ども若者編集部メンバーが、どん底のときに「支えられたもの」を紹介していくコーナーです。

「どうして世の中バカばかりなんだ!」。高校1年生の夏、軽音部をクビになった私は荒れていた。どいつもこいつも、女子が喜ぶ曲を中途半端にチャラチャラ演るのが一番イケてると思ってる。内輪だけで盛り上がるリア充たちに越えられない壁を感じ、途方に暮れた。カッコいいってどういうことだ……。そんなときに出会って